

2018/09/02

「自分自身を愛せる？」

「そこで、イエスは彼に言われた。『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第一の戒めです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。」

(マタイ 22:37-39)

戒めは、「神を愛し、人を愛せよ」と教えていますが、「人を愛せよ」という戒めをよく見ると、「あなた自身のように愛せよ」の一文があります。自分を愛するように人を愛せよ、と聖書は教えているのです。自分自身を愛せない人には、他の人を愛することも、神を愛することもできません。では、私たちは自分を愛しているのでしょうか。

誰もが、「〇〇さんのようになれたなら幸せになれるのに…」と、自分自身を捨て別の自分になることを思い描きます。漫画を読み、小説を読み、映画やドラマを見、誰もがその主人公に自分を重ね、あの人のようになれたなら自分も幸せになれるのにと、思いを外にはせません。しかし、それは今の自分を「嫌いだ」と言っているようなものです。

自分を「嫌いだ」という理由を、ある人は自分の「容貌」が他の人と比べて悪いからとか、ある人は自分の「能力」が人と比べて劣っているからだと言います。ある人は自分の「持ち物」が人と比べて見劣りするからだと言ひ、ある人は自分の親や生活環境が悪いからだと言ひ、またある人は、自分が罪を犯してしまうからだと言ひます。

こうした理由は全て、自分の外側のことであって、人の「いのち」となる「魂」のことではありません。「魂」こそが本当の自分なのですが、それはまるで見ていません。ただ、「魂」の周りを取り囲む「うわべ」を見て、自分を「嫌いだ」と言っているにすぎないのです。しかし、人は「うわべ」が自分だと思ひ込んでいるので、「うわべ」を良くすれば自分のことが好きになり、幸せになれると思ひてしまいます。こうして、人はみな自分を捨てる旅をするようになります。

こんな話を讀んだことがあります。それはヨーロッパの話で、馬車が交通手段であった時代、貧しい農夫が靴下と靴を買った話です。

あるところに、貧しくて靴下も靴も買えない農夫がいました。彼は、都会に住む人たちのように自分も靴下と靴を履けるようになりたいと思ひました。彼らのようになれば、自分は幸せになれると思ひたのです。そこで彼は上京し、一生懸命お金を稼いだ。彼は手にしたお金で、靴下と靴を買って履きました。なんだか別人になったような気がして嬉しくなりました。彼の手元にはまだお金があったので、彼は嬉しさのあまり酒を飲みました。ところが、彼は酔いつぶれて、道ばたに横たわってしまいました。

そこに馬車が来ました。馬車の従者は道ばたで酔いつぶれていた農夫に叫びました。「そこをどけ。どかないと馬車がお前の足を引いてしまうぞ」と。そこで農夫は、自分の足をまぎ

まざと眺めると、その足は、何と靴下を履き、靴も履いているではありませんか。それを見て彼は言い返しました。「それは俺の足ではない。だから好きにしろ」。

これは、実に滑稽な話ではないでしょうか。この話は、人は別人になったつもりでも、それは借り物の姿にすぎないので、それを本当の自分としては認識できないということを風刺しています。

つまり、人は本当の自分からは何をしていても逃げられないのです。それは影のように、どこまで逃げようが一定の距離を保ちながらつきまどってきます。どうやっても、本当の自分を捨てることなどできません。だから、「うわべ」を良くして別人になって幸せを覚えても、いつかは夢から覚め、再び自分と向き合うことになります。現実の自分と向き合うときが訪れ、夢ははかなく散ってしまいます。

■鉄腕アトムの話

私が小学校の低学年のころ、「鉄腕アトム」というテレビアニメが大流行していました。子どもであれば誰もが「鉄腕アトム」という強いロボットに憧れました。私もその一人でしたが、それで私は「鉄腕アトム」の衣装を作り、それを着て遊びました。着ているときは「鉄腕アトム」になった気分になり、とても幸せでした。

しかし、今はそのような衣装を身にまどっても幸せになどなれない。いや、今も私が「鉄腕アトム」の衣装を着ていたなら、周りの人も、自分自身も、「馬鹿じゃないの」と一笑に付すことでしょう。それは、それを着ても「鉄腕アトム」にはなれないことを知ってしまったからです。

人はこうして、〇〇のような人になれたなら、必ず幸せになれると思い、自分を無視する旅に出ます。そして、別の衣装を着て別人になりすまそうとします。そのときは別人になった気分がして幸せになりますが、しばらくすると我に返り、別の自分になどなれないことを悟るのです。そうであっても、自分が嫌いなので、再び別の自分になろうとします。

また、人は、これさえ手にできれば幸せになれると思い、必死になってそれを手に入れ、自分の「うわべ」を着飾ろうとします。着飾って、別の自分になれたことを喜び幸せな気持ちになります。それはブランド品の洋服かもしれません。高価な車かもしれない。あるいは、人がうらやむような豪邸かもしれません。そうやって、人は何かで自分を着飾ることで別の自分になったと思い、幸せを謳歌するのです。しかし、時間の経過とともに、幸せな気分の夢から覚め、別の自分になどなれないことを悟ってしまいます。そして、人生に絶望するのです。

こんな話があります。ある人が事業に成功し、お金持ちになりました。彼はプール付きの立派な豪邸を建て、友達を招待しました。彼は憧れていた金持ちになったことで、自分が別人にでもなった気がし、とても幸せでした。しかし、段々と友達は彼のところに寄りつかなくなり、彼も、年を重ねていくうちにトイレが近くなり、夜は何度となくトイレに行

くために目が覚めるようになりました。彼はトイレの横にあった物置にベッドを移し、そこで寝るようになりました。彼は絶望し、そして寂しく死を迎えました。彼は多くのものを手にしたのに、結局、幸せになどなれなかったのです。

イエス様も、似たような譬えを話されました。ある金持ちの畑が豊作だった話です（ルカ 12:16-21）。彼は豊作を蓄えておく大きな倉を作り、自分の魂にこう言いました。「たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ」（ルカ 12:19）。しかし、神は彼にこう言われました。「愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか」（ルカ 12:20）。

この譬えでイエスが言われたのは、「〇〇さえ手にできれば幸せになれる」と人は思っても、それはまやかしかだということです。「〇〇さんのようになれたなら幸せになれるのに」と人は思っても、それは見せかけの幸せであるということです。では、なぜ人は望んでいた「うわべ」を手にしても幸せになれないのでしょうか。

【幸せになれない理由】

(1)見えるものは朽ちるから

人は、「〇〇さえ手にできれば幸せになれる」と思い、少しでも多くの富を手にしようとします。しかし、イエス様が言われたように、「愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか」（ルカ 12:20）となり、必ず死が訪れ、手にしたものすべては奪われてしまいます。つまり、見えるものは全て無価値であり、無価値なものゆえに、それを手にしようが幸せになどなれないのです。

「〇〇さえ手にできれば幸せになれる…」というのも、「〇〇さんのようになれたなら幸せになれる…」というのも、そこにある考えは同じです。「うわべ」を変えることが自分を変えることであり、自分を変えれば自分を好きになり幸せになれると思っています。しかし、そうした「うわべ」は滅び行くものであり、無価値です。無価値なものゆえ自分自身の価値には何の影響もなく、自分自身も何も変わってなどいません。

どんなに美しい容貌を手に入れようとも、時間の経過と共に、「昔はキレイだった」となるだけです。人に襲いかかる老化現象が、どんなに美しい「容貌」を手にしようと、どんなに素晴らしい「能力」を手にしようと、全てなかったことのようにしてしまうのです。これでは、どんな「うわべ」を手に入れたところで自分は変わっていません。その時は変わったと思っても、実は何も変わってなどいないのです。老化とともに嫌いな自分が顔を覗かせ、自分は何と不幸かと叫ぶしかありません。

新車を買って乗ると、誰もが幸せな気分になります。周りからも、「わー、すごい」と言われます。しかし、乗っている自分は何も変わっていません。ただ、誰もがうらやむ車を身にまとったにすぎません。時間が経過すればするだけ車もボロくなり、誰も称賛などしなくなり、その車に乗ることが恥ずかしいと思うようになります。

このように、人は、「うわべ」さえ良くすれば幸せになれると思います。見栄えのする容貌、見栄えのする洋服、見栄えのする家族、見栄えのする学歴など、そうしたものを手にできれば幸せになれると思込んでいます。確かに、一時は幸せな気分になりますが、それは見せかけの幸せであり、その下には「不安」が大の字に横たわっています。見えるものは朽ち果てていき、朽ち果てないとしても死を迎えると同時に、それは他人の手に渡ってしまうので、何も残りません。そのようなものは無価値であって、無価値なものでは幸せになどなれないのです。

「人はみな草のようで、その栄えは、みな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。しかし、主のことばは、とこしえに変わることがない。」とあるからです。あなたがたに宣べ伝えられた福音のことばがこれです。」(I ペテロ 1:24-25)

(2)自分の「いのち」を無視するから

「うわべ」を変えても幸せになれない2番目の理由は、「いのち」を無視するからです。人は「魂」と「体」からなる総合です。「魂」が人のまことの「いのち」であり、「体」はそれを支える命となります。「魂」と「体」をまとめるのが「精神」であり、「精神」は「魂」や「体」のような実体はありません。そして、まことの「いのち」である「魂」は、神を慕い求めています。

「鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえぎます。私のたましいは、神を、生ける神を求めて渴いています。」(詩篇 42:1-2)

「魂」が神を慕い求めるのは、それは神の「いのち」で造られていて、神の部分だからです。「私たちはキリストのからだの部分だからです」(エペソ 5:30)。部分ゆえに、本体である神を慕い求めるのです。「魂」は、まさしく神と同じ永遠性を有しています。

ということは、そのまことのいのちである「魂」の欲求を満たしてあげなければ、人は幸せになどなれないということです。ところが、人にはそれができないのです。なぜそれができないかというと、今日の私たちの「体」が有限性になってしまったからです。そうなったのは、悪魔の仕業によってアダムが罪を犯し、その罪によって「死」が入り込んだことによります。「このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです」(ローマ 5:12 新共同訳)。そのため、「魂」は神を慕い求めても、「体」の五感では神を認識できず、神を直接求めることができません。「神を求める人はいない」(ローマ 3:11)。それで「魂」の欲求を満たしてあげることができません。

さらに言うと、「魂」を支える任を持つ「体」が有限性になったために、肝心な「魂」さえも認識できなくなっていました。そうであっても、「魂」と「体」を取り持つ「精神」は健在なので、「精神」は深いところで永遠性を意識しています。ゆえに、「魂」の求めに応じて

神を慕い求めようとしますが、「体」が有限性を帯びたためにそれができません。それで「魂」の求めは置き去りにされ、「体」の求めが優先されるようになりました。「体」を喜ばせることを求め、本当の「いのち」を無視するのです。滅び行く命に目を向け、その命を着飾ることばかりに精を出し、それを幸せとするようになりました。

これでは、幸せになどなれません。人は、「魂」が満たされてこそ幸せになれるのであって、無視された状態であれば、何を食べ、何を着ようとも幸せになどなれないのです。お腹が空いているのに、食べさせないままでは満足など得られないのと同じです。人はいくら「うわべ」を変えても、すなわち「体」を着飾っても幸せになどなれないのは、自分の本当の「いのち」となる「魂」の欲求が無視されているからにほかなりません。

(3)自分の罪を放置するから

「うわべ」を変えても幸せになどなれない理由は、まだ他にもあります。人は神の似姿として造られているので、罪を犯すと責めを覚えます。それで、人は罪を犯す自分を嫌います。周りからも嫌われます。そこで人は自分を着飾り、自分は良い人間ですという振りをします。私は「罪人」ではありませんという顔をします。私は法律を犯さないし、真面目に生きているという顔をし、誰もがそんな彼の顔を見て、彼は立派だと称賛します。その称賛が、幸せな気分にしてくれます。しかし、そういう気分にしてくれるというだけであって、その下には「不安」が大の字に横たわったままです。だから、幸せになどなれないのです。

その「不安」を生産しているのはほかでもない、罪です。誰もが、自分の罪深さを知っていて、それが「不安」を生産します。例えば、偉い人には相槌を打ち、陰ではその人の悪口を言ってしまうという罪深さが、「不安」を生産します。人に対して怒りや嫉妬を覚える罪深さが、「不安」を生産します。人には言えない悪いことをした事実が、「不安」を生産します。それをいくら隠しても、「不安」はそのままなので幸せになどなれないのです。

アメリカに留学中、こんな出来事に遭遇しました。神学生だった私は、ある家族に晩ご飯を招待されました。そこには三人の子どもがいて、一番下は五歳の女の子でした。両親は食事の準備をしていました。その時、女の子の体がテーブルの花瓶にぶつかり落ちてしまいました。花瓶は二つに割れてしまいました。女の子は、必死に割れた花瓶を重ね、何とか元どおりの状態に戻しました。親はその様子を影で見っていました。

そして食事が始まると、直したはずの花瓶が壊れてしまいました。誰も何も言わないのに、女の子はすぐに立ち上がり、「私ではないよ」と言いました。そう言いながら目をぐるぐる回し、ついには泣き出し、「私がやったの」と言ったのです。親は直ぐさま彼女を抱きしめ、「罪を隠していてつらかったでしょう。赦してあげるから、もう心配しなくてもいいよ」と言いました。彼女はほっとし、食事を続けたのです。

人は罪を犯すと、バレはしないかと「不安」になります。そうした「不安」はいくつもあり、心の中に「不安」が貯まりに貯まっています。そうであってもそれを無視し、何食わぬ顔

をして、「私には罪がありません」と人は言います。「見てください。私は立派な人間です」と、別人になりきって見せるのです。ですから、幸せになどなれないのです。その下には未処理の罪が横たわり、「不安」が大の字に横たわっているからです。それで聖書に、次のような御言葉があります。

「もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。」(Iヨハネ1:8)

聖書は、「私には罪がありません」という顔をするなら、自分を欺いていると断言します。「〇〇さえ手にできれば幸せになれる…」というのも、「〇〇さんのようになれたなら幸せになれる…」というのも、それは「私には罪がありません」という顔をすることであり、自分を欺いています。自分を欺いて、どうして幸せになどなれるのでしょうか。なれっこない。ならば、どうすればよいのでしょうか。

このように、人は「うわべ」を変えても幸せになどなれません。どんな「うわべ」を手にしようと、それは朽ち果ててしまう以上幸せになどなれないし、どんな「うわべ」を手にしようと、それは「魂」に食事を与える行為ではないので幸せになどなれないのです。どんな「うわべ」を手にしようと、罪を放置したままでは幸せになどなれません。幸せになるには、「うわべ」を良くするのではなく、自分自身を愛するしかないのです。

感謝なことに、神が用意してくださった福音は、自分自身を愛せるようになる福音です。自分を愛せるようになり、神と人を愛せるようになるのが福音です。ならば、神の福音の下で、どうすれば自分を愛せるようになるのでしょうか。

【自分を愛する道】

(1) 罪を言い表す

私たちは、罪を放置するので、自分のことを愛することができません。そこで神は、罪を言い表すよう教えています。そうすれば、どんな罪でも神は赦してくれます。

「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」(Iヨハネ1:9)

罪を言い表すとは、神に身をゆだね、神の御手の下にへりくだることをいいます。神にあわれみを乞うことを意味します。そうすれば、罪が赦されます。私たちには、十字架の保証があるので、罪を犯す自分を受け入れ、自分を愛せるようになります。

(2) 御言葉を食べる

私たちの「魂」は神を慕い求めています。「鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえぎます。私のたましいは、神を、生ける神を求めて渴いてい

ます」(詩篇 42:1-2)。しかしその神に、この世界では見ることも触れることもできません。そこで神は、ご自分を「ことば」として表されました。

ですから、私たちの「魂」は、御言葉を欲しているのです。御言葉を心に食べさせるとき、私たちの「魂」は、喜びます。特に力となる御言葉は、十字架の言葉です。

「十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。」(I コリント 1:18)

イエス・キリストが私たちを愛してくださった証しである十字架の言葉を受け取るとき、私たちは自分を愛することができるようになり、心に平安が訪れます。

(3)「永遠のいのち」を垣間見る

自分自身を愛せないことの最大の原因は、「死」の存在です。自分自身を見たくないことの最大の原因は、「死」に呑み込まれてしまうという現実があるからです。そのせいで、たとえキリスト者であっても、「〇〇さえ手にできれば幸せになれる」と思い、あるいは「〇〇さんのようになれたなら幸せになれるのに」と思い、別の自分を愛そうとしてしまいます。この問題を解決するには、神から賜った「永遠のいのち」を垣間見るしかありません。キリストを信じる者であれば、例外なく、誰であれ「永遠のいのち」を持っています。

「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」(ヨハネ 10:28)

私たちは「死」に呑み込まれるのではなく、「死」が「永遠のいのち」に呑み込まれてしまうのです。そのことを「信仰」で見えるようになれば、自分が嫌いだという旅は終わります。自分を捨て、自分から逃げる旅に終止符を打つことができます。

『青い鳥』の話がありますが、人は幸せが自分の外にあると思い、幸せを捜す旅に出ています。しかし、まことの幸せは自分の中にあります。自分自身の中にこそ、変わらない幸せがあるのです。神が愛するというあなたを、あなたも愛せるようになることが幸せの唯一の道です。それで神の福音は、あなたが、あなた自身を愛せるようにするためにあるのです。